

宇井伯寿著

「訳経史研究」

古田和弘

本書は、中国佛敎史の草創期における佛典の漢訳、および漢訳の佛典について論じた宇井伯寿博士の五篇の遺稿を編集したものである。すなわち、次に掲げる通りの、それぞれ独立した論稿を併せ収めているのである。

「シナ佛敎最初安世高の研究」

「の訳経弘伝者安世高の研究」

「支讖の訳書に於ける音訳一斑」

「般泥洹經二卷の訳者は支讖か」

「支讖と康僧会との訳語と其の原語」

「インド語より見たシナ文字の発音」

本書に「訳経史研究」と題されているのは、これが、經典翻譯の歴史を何かの体系によって組織的に研究した一書であるという意を意味するのではない。中村元教授による本書の「あとがき」によれば、はじめの四篇は宇井博士が生前に出版社に托しておかれたものであり、最後の一篇は逝去された後に畫齋から発見された研究メモであるという。いずれも、博士が第一線を退かれて以後、八十二歳を以て他界されるまでの間に執筆さ

れたということである。

最初の「安世高の研究」(P.p. 1-167)は、本書の大部分を占める長篇である。安世高は後漢の桓帝のはじめに安息国より長安に達した中国佛敎の最初期に属する佛典伝訳者であった。この論稿では、まず彼の伝記を整理し、ついで出三藏記集によって彼の訳出經典を存欠合わせて列挙し、更に彼が翻譯に際して用いた音写語を逐一掲げて、その意味するところを定め、それぞれのように音写されることとなった理由を推求してある。それによれば、彼の音写語の原語は、パーリ語または中央アジアの諸語の影響を受けた俗語であつて、雅語たる梵語ではないことがわかるという。そしていよいよ、安世高所訳として確かな人本欲生經など十九經の一々について訓読文を載せ、その中の主要な佛敎用語、難解な語句などについて刻明に註記を施してある。この歴大な訓読と註記との部分は、この一篇のみならず本書全体の中核をなすものであつて、まことに何人もおいそれとは果し得ない大変な労作である。また「余論」として、隋代の歴代三宝紀以後、安世高の所訳に帰せられ現に大正大藏經にもそれが踏襲せられている三十四經を掲げ、それらがすべて歴代三宝紀の撰者費長房の誤謬もしくは故意の仮託によるものであることが論究されている。つづいて更に、安世高による特異な訳語の原語、およびその今日一般に承認せられている漢訳例との対照一覧表が附載されている。

著者はかねて中国の初期の佛敎学に深い関心を寄せておられた。中国佛敎の事実上の確立者と目される苻秦の道安について

研究され、その成果を『釈道安研究』（昭和三十一年岩波書店刊）として上梓されたのはその現われである。道安は安世高を厚く敬慕し、彼の訳出にかかる禅經を賞揚した人であった。従っていまここに、著者が特に安世高訳の經典の解説に精魂を傾けておられるのは、「緒言」にも自記されている通り、当然の發展の帰結であったというべきであろう。『釈道安研究』においても、道安の伝記の整理、著作の書誌学的検討、道安所撰の經序の訓読および註解などという方法がとられており、その手法が本稿においても全く同様に採用せられたのであった。

『釈道安研究』における經序の訳註には、再検討の要ありと考えられる箇所が見受けられないではなく、本稿での訳註も同様にも必ずしも十全なるものとは云い難いようであるけれども、どれもこれも難解な十九經の經文の全文をとにかくにも読解するということは至難の業であって、その敢行は梵漢兩文に造詣の深い博士ならではの壮挙である。

以下の四篇はいずれも短篇である。第二の「支謙に於ける音訳一斑」（Pp. 469-515）は、後漢の桓帝の末に月支國より洛陽に到った支婁迦讖訳の大乗諸經典のうち、特に道行般若經十卷に見られる音訳語一一九例を摘出し（著者によればこの数字は道行經にある音訳語のすべてを意味するという）、その一々について原語を推定し、それらの原語がすべて俗語であったことを想定されている。支婁迦讖訳の諸經の音訳語には俗語音が圧倒的に多いことから、月支の佛教、少くとも支謙の時代の中央アジアの大乗經は大きく俗語に傾いたものであったことが知られ

るといふ。

なお、支婁迦讖の伝記の整理、彼の名の還元梵語の想定などのほか、般舟三昧經についての書誌学的な研究が付せられている。般舟三昧經に一卷本と三卷本との二本別行するうち、一卷本は竺朔佛・支婁迦讖の共訳、三卷本は竺法護の訳であると博士は論定された。これは、両本をともに支婁迦讖の訳に帰せしめた開元録の記述およびそれを踏襲している大正大藏經の取扱いに訂正をせまるものである。

第三の論稿「般泥洹經二卷の訳者は支謙か」（Pp. 517-523）は、現に大正大藏經第一卷に訳者不明のままに収載されている般泥洹經二卷について、その訳者は実は呉の支謙であるとの主張を論証したものである。論証に当っては、出三藏記集、歴代三寶紀、開元積教録など經録相互の記録の矛盾や誤謬をつきとめ、それに解決を図る一方、梁の僧祐の釈迦譜に見られる「雙卷大般泥洹經」からの引文と現行の般泥洹經との行文上の類似性、一致点を確かめ、確実に支謙に帰せられる他の訳書の訳語の特徴をも勘案し、これが同じく僧祐により出三藏記集において「支謙出大般泥洹經二卷」と記録されたものに該当すると結論された。この結論が妥当であるか否かはいま俄に決し難いが、新しい問題を提起して研究者の深い注意を喚起されていることは確かである。附記されたところによれば、この主張は、著者の東京帝国大学における卒業論文の一部をなすものであったという。実に半世紀にわたる懸案であったわけである。

第四の「支謙と康僧会との訳語と其の原語」（Pp. 525-534）は、

阿含部に属する支謙訳の経文の原語が、パーリ語もしくはその他の俗語であったであろうことを推定しようと意図するものようである。大正大藏経阿含部に現存する支謙の訳経のうちから四経を選んで、これらに対して極く簡略な論評がなされている。しかしこの論稿は、著者の充分な推敲を経ていない未定稿であったためか、或いは何か編集・印刷上の手違いがあったのか、どうも不可思議な点が多い。論旨の展開が錯綜しており、また何を論説しようとしたのかを明瞭に察することが困難であるように見受けられる。わざわざ第一章が立てられていて第二章が見当たらないこと、支謙の伝記や彼の訳経の列挙は過分に詳しいのに対して、康僧会については閑説するところ皆無に等しいことなども目につくことである。

第五の「インド語より見たシナ文字の発音」(p. 535-540)には、「支謙の訳書に於ける音訳一斑」という副題が付け加えられている。おそらく前述の第二の論考において、支婁迦讖の道行般若経の音写語を調査するのに役立つられたものである。音写語の表記に用いられる漢字を挙げ、これに相当するインド語をローマ字によって示し、その読み方を片仮名で表わし、現在の日本人が発音する呉音を添え、この呉音によって五十音順に約二百の漢字が配列してある。例えば、

阿, a, ā, ʾ, ʾ (ā-)
夷, yī, jī, ʾ, ʾ (ī)

というごとくである。標示の不統一な点や不可解な箇所もないではないが、辛苦を重ねられた著者の机辺を垣間見させられる

ように感ずる。

卷末に、編者による懇切丁寧な補説があつて、本文中の引用文を原典に当って調査した校異、編者による加筆訂正の箇所とその理由の明示など、読者の理解を助ける周到な補足的説明が九頁にわたつて詳細に列記されている。宇井博士に対する編者の厚い敬意、そして遺稿の公刊に際して払われた細心の配慮と労苦の程を察するに余りある。ただ、本書の全体に、誤植と覺しき箇所があまりに多く数えられるのは残念なことである。支謙と支謙とが混乱しているなど、読者を難渋させる例が少くないので、徹底的な修正を切に希望するものである。

本書の各篇を通覧すれば、それらに共通した特色として次のような点が注意されるであろう。まず第一に、いずれの論稿においても一貫して、佛教学の出発点ともいふべき基礎的な作業に努力を専注されたことである。すでに明らかかなように、経文の訳註、音写語の検討、翻訳の実情の探索などというような極めて木目の細かい文献操作を主としており、しかもそれが、まとも過ぎるくらいにの正攻法によってなされているのである。これは博士のすべての研究業績において見られる性質であるが、それにしても、安世高の訳経の訓読註記をはじめ、徹底した忍耐を要する研究に高令を以て挺身せられたことは何人も驚歎を禁じ得ないであろう。われわれはここに学問研究の行きつく一つの境地を見て取ることができるようである。

第二には、初期の中国佛教の形成に貢献した訳経者たちに対

する深い敬愛の情が著者の筆致に満ちていることである。安世高をはじめ、支婁迦讖、支謙といった人々が訳語の選定に際して払った苦心の程を偲び、これに暖い同情を惜しまれなかった。ただ、時としてそれがゆきすぎることがある。出三蔵記集に収める経序・経記の類は、その性質上、彼ら訳経者たちの徳行を賛仰した文辞が多いが、本書には、史実の解明に当ってそうした贅辞が史料の実例としてしばしば取り上げられているのが目につく。卑見によれば、資料としての経序にはしかるべき限界を認めなければならぬから、経序への没溺過信、その記載事項の単純な図式化は禁物である。だがしかし、逆にそのような過信を誘引する程にまで彼ら訳経者たちの事蹟に対する博士の尊嵩の心は厚かったのである。博士は、周知の如く、インドの哲学・宗教、大乘佛教の諸経論に関する研究の權威であり、また禅学をはじめ熟成した中国佛教の教義にも詳しい碩学であった。その博士が晩年には、主として小乗経を伝えた安世高に対してことのほか関心を寄せられたということは、すこぶる意味深いことと思われる。博士の学風は、極めて学術的であると同時に、実践的求道的な面が備わっていたというべきである。

第三に、本書の全篇には、インド・西域に行われた俗語に対する強い関心がかがわれる。これは、著者自ら述懐されるところの意を汲んで云えば、雅語たるサンクリットを直線的に重視してきた明治以後の佛教研究のあり方を反省したものである。同時にまた、漢文訓読は梵語の読解よりも困難であること

がわかったとつくづく述懐される如く、漢訳佛典の取扱いは極めて慎重である。音写語を吟味し、漢訳者の性格についても細かな配慮をされるのはその現われである。ただ、音写語から原語音を推定される場合について、忌憚なく云えば、音写語の中国音の検索のために康熙字典の反切を参照されたようであるけれども、反切法の適用それ自体に無理があるばかりか、日本語音によって切字・韻字を処理しておられるのはこの場合適当であるとは云えないのである。著者は、他に方法がないので無理を承知で反切法に依って発音を比較したと断っておられる。しかしこうなると、それは頑固な御隠居の益裁いじりを思わせるものがある。厳密に云えばこの問題は、インド・中央アジア諸地方・中国それぞれの歴史的地域的な音韻の研究に俟たなければならぬであろう。これは日本の学界においてあまり顧慮されてきたとは云えない分野であるから、博士のいまの試みは、佛典研究の向うべき一つの方向を新たに指示したものであることは確かである。インドや中国の俗語の研究や字音の比較検討は、佛典文献の背後に見え隠れする土着性の豊かな佛教思想の解明には欠くことができないからである。

まことに、宇井伯寿博士の遺著は、初期中国佛教の専門研究のために貴重な手がかりを示すのみならず、若い学徒のために方法論上の重要な問題を示唆し、老け込んだ諸学者を叱咤しているようである。

(昭和四十六年三月、岩波書店、A五版、三、八〇〇円)